

勝呂遺跡

平安時代水田址の発掘調査

1987

前橋市教育委員会

勝呂遺跡

—平安時代水田址の発掘調査—

1987

前橋市教育委員会



目 次

はじめに

勝呂遺跡の位置

2

調査に至る経過

3

調査の経過

4

遺跡の地層

5

水田址の概要

6

まとめ

10

調査要項

13

例 言

この報告書は、豊況・森・喜元昭夫氏
が建設する店舗予定地における発掘調
査に関するものである。

調査は、前橋市教育委員会教育課
が担当し、高橋正男・川原・曾が統括
した。

3. 本書の作成は、高橋正男・川原・曾が
共同監修の上、校讎・編集にあつた。

4. 本書籍の部数は、計A16である。

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流し、四季折々の風情に溢れる県都です。

前橋市域は豊かな自然環境に恵まれ、今から2万年前から人々が居住を始めました。そのため、市内の至る所に昔の名残を留める史跡や遺跡が所在します。古代において前橋の地は、かつて市域に古墳が800余基もあったように、上毛野の国を中心として栄え、また、律令時代になってからは總社・元總社地区に、上野國府・上野國分寺・山王庵寺等の重要な施設が次々と建立されました。中世になると、戦国武将の上杉氏・武田氏・北条氏が鎧を削る要所となり、近世においては、諸大名の酒井氏・松平氏が居城した関東三大名城の一つの駿河城がありました。まさに、歴史性豊かな街です。

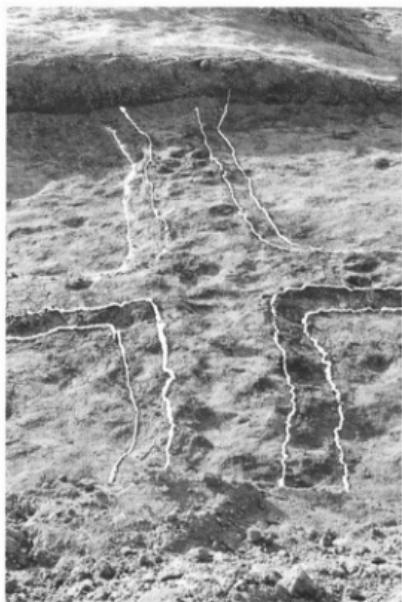
勝呂遺跡は、市の南西端江田町に位置し、店舗建設に伴う事前発掘調査です。調査の結果、平安時代の天仁元年(1108年)の浅間山噴火に伴う軽石に覆われた水田址が発見されました。本水田址は、高崎市の日高遺跡・日高条里、前橋市内の前箱田遺跡・箱田境遺跡との関連が考えられる貴重な遺跡です。

本報告書を発行するにあたり、物心両面より多大な援助・協力をいただいた富沢滋氏・富沢昭夫氏・株式会社フジマート・鈴弘建設株式会社・大山純市氏に対して厚くお礼を申し上げます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

昭和62年3月1日

前橋市教育委員会
教育長 岡本信正



勝呂遺跡の位置

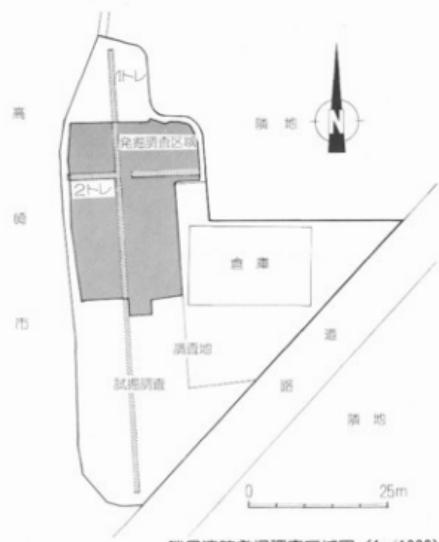
勝呂遺跡は、前橋市の南西端・江田町279-1・280・297に所在し、前橋市役所から3.5kmの所にある。遺跡の西は、高崎市との境界になっており、南は主要地方道前橋・高崎線に面している。遺跡は、前橋台地上にあり、東方150mには染谷川が南下している。付近の標高は約102mで、北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。周辺には、日高遺跡・前箱田遺跡・箱田境遺跡・五反田遺跡・村前遺跡等の水田址が検出された遺跡がある。



調査に至る経過



勝呂遺跡周辺図 (1/5000)



勝呂遺跡発掘調査区域図 (1/1000)

昭和61年5月6日付で本調査地の店舗建設に伴う埋蔵文化財表面調査依頼が、開発事業者である富沢滋氏・富沢昭夫氏より提出された。5月16日に前橋市教育委員会社会教育課で表面調査をした結果、本調査地は、古代条里制のしかれた水田址である可能性が極めて高いことが判明した。そのため、6月19日に調査地の東西・南北に幅1 mのトレンチを2本設定し、遺跡確認調査を実施した。その結果、調査地より浅間日鉱石に覆われた平安時代の水田址を検出した。そこで、前橋市教育委員会と工事施工者である株式会社巴組鉄工所・株式会社フジマート・鈴弘建設株式会社・大山純市氏で協議調整を重ねた結果、前橋市教育委員会直営で発掘調査を実施することとなった。なお、本遺跡の名称は、耕地図による旧地籍の字名を採用し、**勝呂遺跡**とした。

調査の経過

発掘調査を実施するにあたって、表土の掘削は重機で行い、測量については測量会社に委託した。また、調査区域がほぼ長方形をしていることから、グリッドは区域に沿った形で4m四方で設定した。

発掘調査は、昭和61年12月1日(月)の発掘現場事務所での関係者との打ち合わせから始まり、11日(木)に終了し、その後測量作業をお願いした(実質10日間)。曇の上では、立冬も過ぎ冬至に手が届く時期だったが、あだやかな晴天と開発事業者の援助協力と調査員・作業員の熱意努力により、調査は順調に進捗し、当初の予定通りにすべての調査を終了することができた。

発掘調査経過表

月 日	調 査 工 程	記 事
12/1	■	打ち合わせ、表土掘削開始
2		
3		表土掘削終了、プラン健認
4	■	調査開始
5		
6		
7		
8	■	
9		
10		
11	■	調査終了、写真撮影
12	■	測量作業開始
13		
14	■	
15		
16		プラントオーバル分析資料採取
17	■	残務整理、事務所の引き渡し
18		
19		
20	■	測量作業終了

■ 表 土 掘 刃

■ 振 り 下 げ

■ 写 真 摄 影

— 测 量 作 業

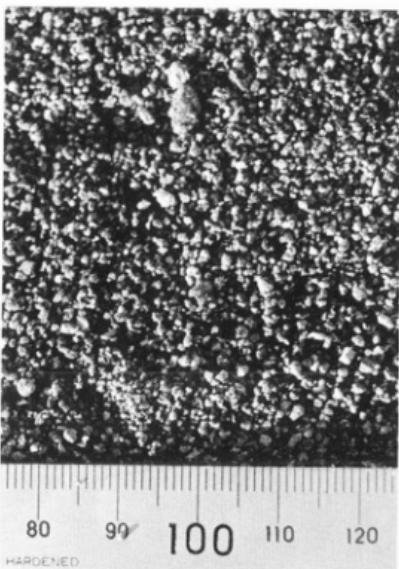
▲ 発掘風景



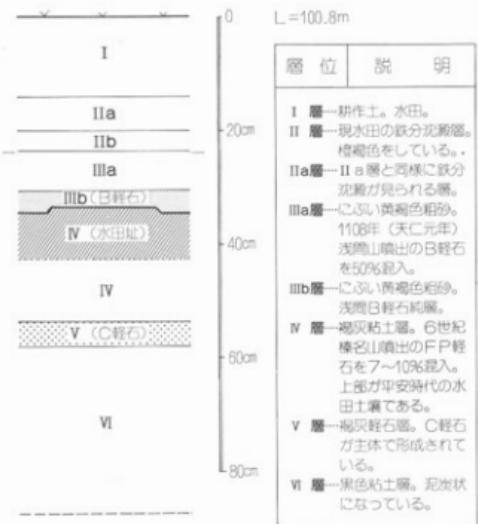
▼ 捜出された水田址



▼ 浅間白輕石



遺跡の地層

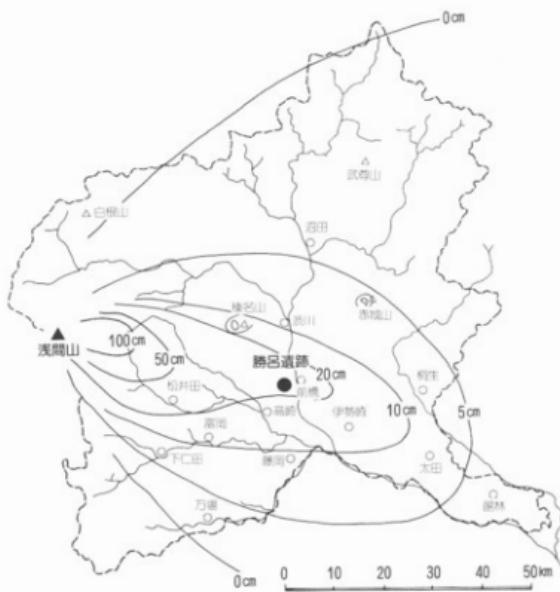


勝呂遺跡の地層 (1/10)



浅間山は、今から1万年前までの間に大規模な噴火活動を4回起こした。そして、偏西風の影響を受けて、関東一円に軽石等の噴出物を降らせた。中でも、今回本遺跡から検出した浅間B軽石を降らせた平安時代の天仁元年（1108年）の噴火が最大規模のものだった。この噴火により群馬県下には右図のように多量の軽石が堆積し、人々は水田の復旧をあきらめざるを得なくなり、田畠が減少した。近年群馬県下では、この軽石層下の水田址があちこちで発見され、当時の水田の様子が解明されてきている。

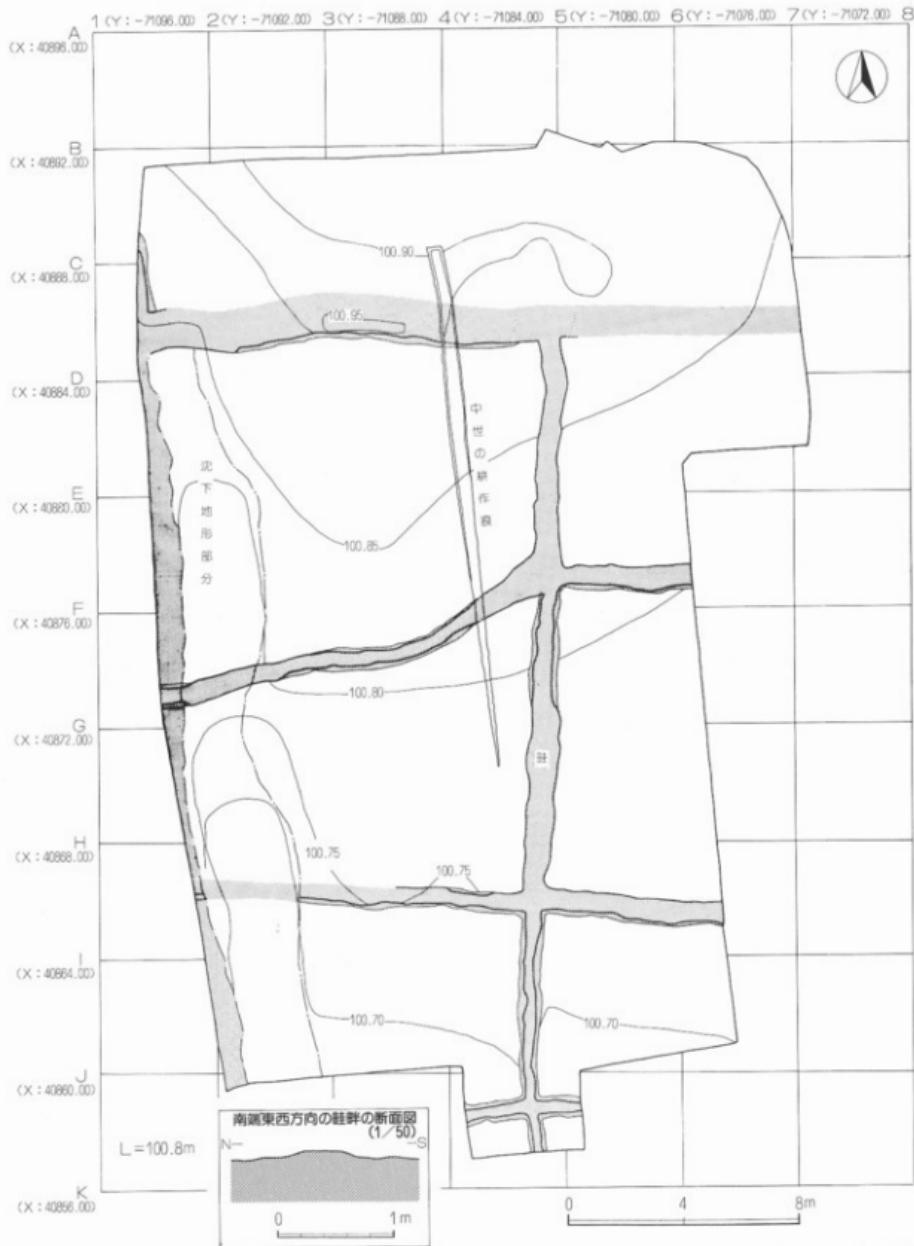
このように、軽石等の火山噴出物は広範囲にわたって一時期（数時間～数日間）に堆積するものであることから、考古学では、同時期判定の基準となる資料として重要なものとなっている。



浅間B軽石降下の等厚線図 (新井1978による)



水田址の概要



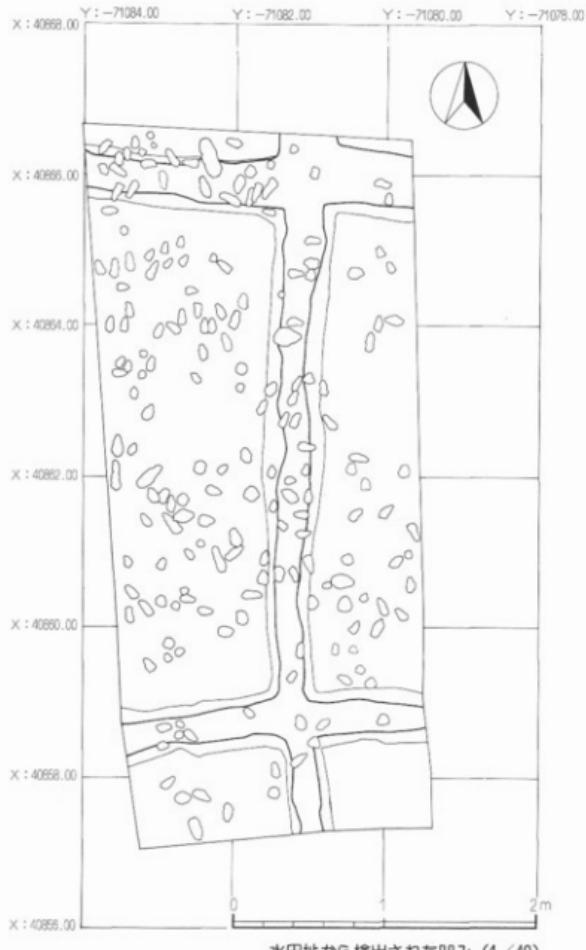
勝呂遺跡全体図 (1/200)

本遺跡では、平安時代の水田が当時の状態のまま、浅間日軽石層下に8面検出された。水田の形状は、南北7~11m、東西10~14mの東西を長軸とする長方形を呈しており、面積は平均して約120m²前後である。水田の残存状況は、北に比べ南の方が良好だった。これは、遺跡地の地形が南に傾斜しているため、軽石が南に向かって厚く堆積しており、その後の耕作による掘り返しの影響を受けなかつたからと思われる。

検出された畦畔は、調査区域の北端と西端にある条里の坪を形成している東西・南北に伸びる大畦畔（幅約1.5m）6本をはじめとして、合計16本であつた。畦畔の大きさは、大畦畔を除き幅約60cm、水田面からの比高約2~8cmを測り、南へ行くほど畦畔は、はつきりと確認できた。畦畔の向きは、東西方向か南北方向かで、南北畦畔の方はほぼ真北を示しており、東西畦畔はそれに直交するように走っていた。

なお、水田面からは、人の足跡を始めとして、牛・馬と思われる足跡、農耕具の跡の痕跡が無数発見された。（右の図・写真参照）

註 1町(109m)四方を区域する大畦畔で囲まれた範囲をさす。

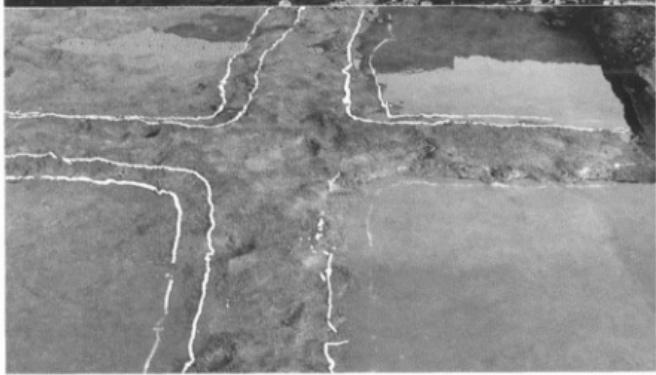
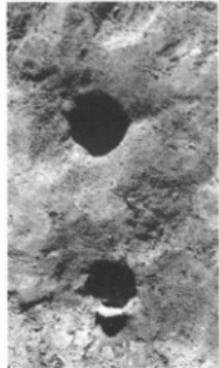


▼ 人の足跡

水田址から検出された凹み (1/40)



- ▲ 水田址の全景
- ▶ 梢出された鞋群
- ▶ 雨上がり後の鞋群
- ▼ 昭和20年8月14日に米軍より投下された焼夷弾

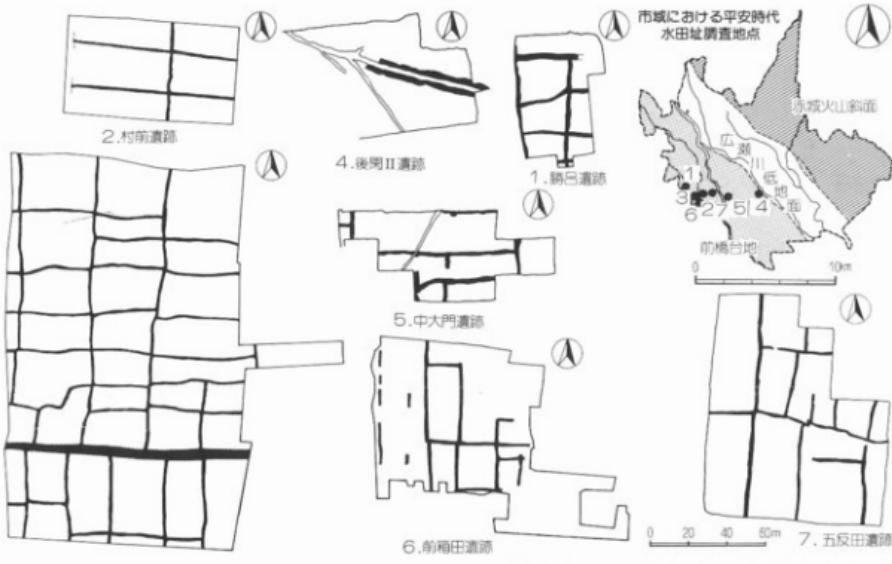


ま と め

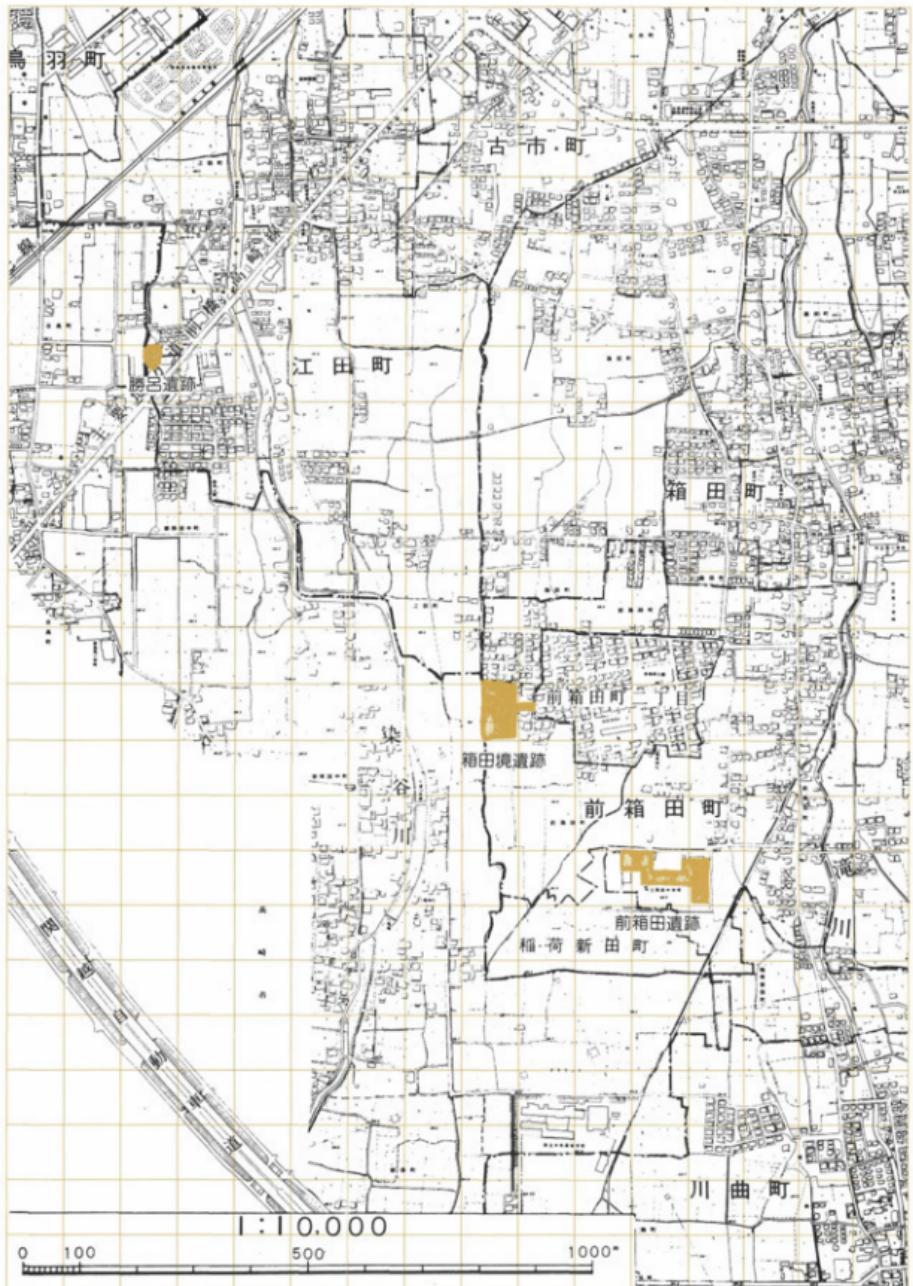
調査の結果、『中右記』による天仁元年（1108年）浅間火山噴出の日軽石に埋没された平安時代水田が8枚検出された。畦畔の遺存状況は南側にいくにつれ良好であり、北側では判然となかつた。このことは、傾斜地形と後世の耕作が相まって作用したことである。しかし、本遺跡の周囲をとり囲んで調査を実施している日高遺跡の成果を見る限り、本遺跡は全面にわたって水田として利用されていたことが考えられる。本地域の地形を細かく観察すると江田の集落が存在している面は微高地を形成しており、古代から居住域として利用されていたものと考えられる。水田址の調査としてはビニール中袋1個分の土器破片がみられたことは、そうしたことを示唆しているものとしてとらえられる。検出された水田は方眼状をなし、東西に12m南北に10m、東西がやや長く長方形を呈するもので、面積120m²前後と比較的小区画をなすものであった。

前橋台地における古代水田址の研究は高崎市教育委員会の一連の調査に委ねられてきた感がある。隣接する日高遺跡を始めとして大八木遺跡、小八木遺跡、正觀寺遺跡等、土地改良事業に伴う大規模な調査による成果にもとづき、詳細な分析がなされつつある。前橋市域での調査は、すでに土地改良事業や住宅団地造成が終了していることもあって、民間開発に伴う事前調査により点的な成果を上げることができている。今後、前橋台地西部の成果を敷衍することによって、東部の点的成果を関連づける作業が必要となってこよう。

現在までに市域で調査されている平安時代の水田址は7例を数える。これらの水田をみると村前遺跡では、直線的にのびる畦畔で区分され、東西に長い水田が6面検出されている。面積250m²と比較的区画の大きいものである。箱田境遺跡は条里地割の坪畦畔推定線を境に形態の違



前橋台地における市域の水田調査集成図 (1/1500)



勝呂遺跡周辺の条里地割（横倉1981による）

違いをみせている。北は南北に伸びる駐畔によって大きく区分され、その中を東西に分割し、170m前後の区画を形成している。南は南北の区画により230mと大きめの水田が形成されていた。前畠田遺跡の調査は出水に悩まされる悪条件下のトレンチ調査であるため、不詳な部分を残すが南北方向に長い水田で160m前後とみられる。五反田遺跡でも南北に細長い形態が認められた。やや少し離れた中大門遺跡では東西方向に長い水田が9枚確認されている。この他に後閑II遺跡で水田址が検出されているが、遺存状況が悪く、駐畔も溝の両脇に検出されたにとどまり、不規則な方向に伸びていたものであった。平安時代の水田形態の大別については、日高遺跡^{*3}での分析により、半折型→不規則なもの→長地型の三形態に分類され、変遷が考えられている。村前遺跡、中大門遺跡が半折型に、畠田境遺跡、前畠田遺跡、五反田遺跡や本遺跡例が長地型に該当しよう。このように多くの水田形態は新しい傾向を示すものとして理解できる。

今回調査した勝呂遺跡の北の東西駐畔は大きさから条里制の遺跡を残す点で重要である。更に現在の高崎市と境界をなす部分に検出された駐畔は検討の余地を残すが本来の坪駐畔より西へ30m程移動した条里地割との一致がみられる。この区画し直しは10世紀後半以降と考えられ旧来の条里地割を尊重しつつ、水利条件によって耕地範囲の移動が存在したことを想定している。そうなれば、本遺跡の区画も10世紀後半以降に再編成された水田であることが考えられる。条里の地割開始は、大化改新以後、7世紀後半から8世紀初頭にかけて実施されたことと考えられている。一方、日軽石で埋没した水田は、耕作下限が11世紀末から12世紀初頭に置かれるものであり、かたや中世社会へ移行する時期のものである。およそ400年間の隔りをもつものであるため、条里の復元にあたっては、幾つかの検証を踏まえなければならない。今後も調査例の増加する日軽石埋没水田址の分析を通して、律令体制下の口分田のあり方を復元することによって、政治的要因にむすびつくことと考えられ、更に上野国府の実態も解明できるものと思われる。これから本遺跡におけるような調査事例の集積が、古代上野国を解明する手立てと考えられる。

註

1 高崎市教育委員会『日高遺跡発掘調査報告書』 1981、同『日高遺跡Ⅳ』 1982による。

2 前橋市教育委員会『前畠田遺跡』 1983

同 上 『中大門遺跡』 1983

同 上 『後閑II遺跡』 1983

前橋市教育委員会、前橋市埋蔵文化財発掘調査団『和田浜遺跡』 1986

村東遺跡、五反田遺跡については昭和60年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した。近く報告書が刊行される予定である。

3 日軽石埋没水田址の形態分類については駐1の文献による。種別はA～HタイプでCタイプに並種がつくため9タイプに分類されるという。これらのタイプを規則性の有無で大別すると3形式になるという。

4 文献1では長地型のうちのHタイプを11世紀後半の所産としている。

調査要項

遺跡名称 謝呂遺跡(せくろいせき)

遺跡所在地 群馬県前橋市江田町279-1、280、297

遺跡記号 61A16

調査期日 表面調査 昭和61年5月16日
試掘調査 昭和61年6月19日
発掘調査 昭和61年12月1日～12月11日

調査面積 約631坪

開発面積 2,282坪

調査原因 民間開発(志賀建設)

調査依頼者 富沢 滉・富沢昭夫 前橋市江田町672、659

調査主体者 群馬県前橋市教育委員会 教育長 岡本信正

事務局 教育次長 奈良三郎(昭和61年12月31日退任)、岡口和雄(昭和62年1月1日就任)
社会教育課長 米倉 忍 社会教育課長補佐 中崎唯二 文化財保護係長
福田紀雄 主任 清田博一 主事 中野 覚

調査担当者 高橋正男 前原 豊

調査参加者 佐藤忠重・辻川千恵子・相田昌子・今井妙子・富沢ヒア子・小野里はるみ・
住谷文彦・宮原麻吉・富沢清八・富沢千代子・小林延寿・中沢不二・楳塚昌子

調査協力 富沢 滉・富沢昭夫、株式会社フジマート・鉢弘建設株式会社・
関東測量株式会社・多泉測量事務所・大山純市

助言者 横山興一

勝呂遺跡(61A16)

印刷 昭和62年3月1日

発行 昭和62年3月15日

発行者 前橋市教育委員会 前橋市大手町2-12-1

印刷所 (株)みつい企画 太田市飯田町1164番地

